

記号論部会報告

Umberto Eco 記号論

尾立 勝典

呑むために学ぶのか、それとも学ぶために呑むのか？大学あるいは早稲田の研究生生活にとって、または言語研究会あるいはその記号論部会にとって、この問に対する答こそが根本的命題であるように思われる。かのゲーテ曰く、Ergo bibamus!

早稲田言語研究会記号論部会の発端は、尾立と甲斐崎の議論にあった。言語学と文学研究は、同じく言語を出発点としながらも、なぜ相互の意志疎通が困難なのか？なぜ両者の間で言語に対する根本的な認識が異なっているように見えるのか？私たちはいかにして両者を媒介できるのか？では、両者のメタ科学として記号論（あるいは記号学）を選んで相互に知見を交換しよう。それがそもそもの意図であった。当部会の発足に参加したのは、大羽、小倉、尾立、甲斐崎、小林、人見、宮下の計7名である。

こうして、私たちはほぼ月1回の間隔で教育学部8階のラウンジに集合し、「Umberto Eco 著、記号論 〃、1996年、池上嘉彦訳、岩波書店(A Theory of Semiotics, 1976, Indiana University Press, USA)」について議論することになった。Ecoの記号論の根本的性格は、ソシュールの記号学とパースの記号論を融合し、コードの理論と記号生産の理論の基礎を確立することにあると言ってよい。また、むろん本書で直接論述に及んでいるわけではないが、彼はその理論の内部からクリステヴァなどの意味生成の記号論の成立を予測していると思わせるところがある。言い換えれば、それは出版当時の記号論及び記号学の総覧で

あり、統合の構想でもあった。

本年度、私たちは「記号論」を読み終えることができた。細目は「0 序論 文化の論理を求めて」、「1 意味作用とコミュニケーション」および「2 コードの理論」である。私たちの議論の内容をここで詳しく描写する余地はない。ただ、それぞれの興味と見識から参加者が解説を提供し、批判と理論展開を試みた。とりわけ、しばしば話題に上がったのは、彼のコードの理論が語用論や認知言語学との類似性を示しているという事実である。また、彼の理論全般がさまざまな次元において文化批評の可能性を提出しており、さらには自己解体の危険性に対しても開かれているということも注目値する。来年度、私たちはいよいよ「記号論」に取り組む予定である。

で、とにもかくにも私たちは安酒場へ向かうのであった。小倉曰く、「ほんと言うと、最初は、いまさら Eco でもないだろ、なんて馬鹿にしてたんだけど、現代の言語学の方向性までも示唆してるところがある……しかも、今の記号論学者と違って細分化されてないっていうか、総合的っていうか、彼は記号の世界全体を視野に納めてるんだよね……」尾立答えて曰く、「確かに。でも全体的ってことはやっぱり一種のイデオロギーでね、それを解体構築する因子の可能性まで内包しあるいは想定しつつ、あえて体系を打ち立てようってところも彼の見識じゃないかな……」戯れと実体化、エロスとロゴス、はたまた酩酊と知性か。これが差し当たっての結論（あるいは出発点？）かな。要するに、目覚めつつ酔うってことさ。呑みつつ学び、学びつつ呑むべし。じゃ、Ergo bibamus!